ISSN 0285-9823

女子大國文

第百七十四号

令和六年一月発行

伝寂蓮筆源氏物語切「花散里」の性格……池尾和也（一）
『道堅法師自歌合』諸本考……藤原静香（三二）
彙　報……（五六）

金沢文庫蔵
『解脱門義聴集記』『華厳信種義聞集記』所載
声点付和訓訓索引……西崎亨（八八）

京都女子大学国文学会

女子大國文　第百七十四号　令和六年一月発行　京都女子大学国文学会

女子大國文　第百七十四号

令和六年一月十五日　印刷
令和六年一月三十一日　発行

〒六〇五-八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三三番地
編輯兼発行者　京都女子大学国文学会
電話　〇七五-五三一-九〇七六
FAX　〇七五-五三一-九一二〇
振替　〇一〇八〇-五-三一一四

〒六〇二-八一四六　京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所　西村印刷株式会社
電話　〇七五-四四一-四一〇八(代)
FAX　〇七五-四三一-六二八二

彙　報

○女子大國文第一七四号をお届けします。
○公開講座、学会ウォークの感想文を掲載しました。

研究室だより

○本学名誉教授の小椋嶺一先生が、令和五年十月七日に逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。
○今年度の公開講座は、対面での開催に加えて、学外からの参加者を対象にZoomミーティングを併用したハイブリッド形式にて開催いたしました。
○二〇二〇年度以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響で学会旅行を休止していましたが、今年度は新たに「国文学会ウォーク」と題して再開いたしました。

二〇二三年度国文学会行事（後期）

○公開講座
十一月六日（月）午後一時より　於J２２４教室
「本文だけが近代文学か？　―口絵・挿絵に込められた秘密―」
東京大学大学院　総合文化研究科
超域文化科学専攻比較文学比較文化コース
准教授　出口　智之　先生
『時代不同歌合』再考」
国文学研究資料館名誉教授　寺島　恒世　先生

○国文学会ウォーク
十一月十一日（土）午後
京都御所周辺（京都御所、梨木神社、蘆山寺等）を、学部生十七名が、学科主任田上稔先生、運営委員山中延之先生・宮﨑三世先生引率のもと巡りました。

公開講座聴講記（十一月六日）

公開講座「本文だけが近代文学か？
―口絵・挿絵に込められた秘密」を拝聴して

三回生　浦　田　彩　水

今回の公開講座では、近代文学における口絵・挿絵の効果について、出口智之先生にご講演いただきました。現在私は近代文学のゼミに所属しており、日々樋口一葉の作品について考察を重ねていますが、これまで口絵や挿絵を調査対象としたことは一度もありませんでした。そのため、今回のお話は私の近代文学作品に対する意識を変える、大変興味深いものでした。

前半は、江戸と明治では挿絵の雰囲気は大きくは変わらないことや、明治の作家は「画文協奏」でなければならなかったというお話でした。絵は一見ただの飾りだと思い無視してしまいがちですが、絵が上手く描けることも作家の必須の条件であったということを考えると作品における絵の重要性が見えてくる気がします。

後半には、泉鏡花「清心庵」の口絵をもとに、作品における口絵・挿絵のご説明がありました。口絵について、構図は庵に残る摩耶を暗示しているが、小袖と白菊は連れ帰られる摩耶を象徴的に示しているという二重性が示唆されており、鏡花が本文で表している二重性と重なる部分があるとおっしゃっていました。ご講演の前に何回か作品本文を読んでいたのですが、本文だけでなく口絵からも根拠が付されることによって、より作品に流れる二重性を意識しやすくなりました。

ご講演は、「本文を書いた者のみがその作品の作者だという認識を持ちがちだが、絵師や彫師、摺師も作品の作者であり、近代文学作品は集団で創り出されるものだ。本文があれば文学作品は読めるため絵はいらないと言ってしまって良いのだろうか。（筆者による要約）」というように締められました。現在見られる各作家の全集に載っている作品は、口絵や挿絵が省かれているものが多いのが現実です。しかし今回、絵の重要性を学ぶ機会をいただき、この先文学作品を研究していくにあたって、本文以外の口絵や挿絵にも視野を広げていきたいと思いました。改めまして、貴重なお話を有難うございました。

二〇二三年度国文学科公開講座を聴講して

四回生　寺　本　遊　林

出口智之先生のご講演の内容は、発表当時は文章と口絵・挿絵が一体のものとして享受されていた近代文学作品の本文だけに着

目することについて問題提起するものだった。以前から作品と挿絵が一体となって発表されていたことは知っていた。しかし、その挿絵がどのように書かれていたのかということや、それが読者に与えた影響などには意識を向けていなかった。

定期刊行物に連載するには文章が出来上がらない内に絵の指示を出す必要があったと伺った。そのために、掲載されている話の内容と挿絵が全く関係のないものになったり、順番が前後したりすることがあったそうだ。また、読者を飽きさせないために展開の早い話が求められて、内容が絵に映えるような変化に富むものにならざるを得なかったということも言及されていた。文壇で流行している思想だけでなく、出版・流通の事情も作品の内容に関わってくるということを新しく知った。

このような状況から、絵師たちは本文を読まずに挿絵を書くことが多かったという。そんな中で、先生が紹介していた泉鏡花「清心庵」と富岡永洗の挿絵は内容と挿絵が見事に融合して作品のおもしろさがより引き出されていた。多くの人の手によって作り上げられた作品として味わう姿勢をもって、近代文学作品に向き合いたいと思う。

ご講演の内容に言及はなかったが、私は、明治四〇年代から同人雑誌が次々と勃興したことと講演内容に関わりがあるのではないかと考えた。絵の指示を出せない、心理描写を多く書きたいといった事情から絵入りで連載することに限界を感じた作家たちの活路という意味合いがあったのではないか。現段階では想像に過ぎないので、自分で引き続き調べてみたいと思う。

自分の考えに無かった挿絵と文章の関係、そのありかたを知ることができ、得るものが多かった。今後作品に対峙するとき、胸に留めておきたいと思う。

公開講座を拝聴して

三回生　土井萌菜

今回の公開講座では、寺島恒世先生の『『時代不同歌合』再考』というテーマで、『時代不同歌合』の再撰本では後鳥羽院がどのような意図を持って組み替えと差し替えを行っていたのか、というお話を拝聴した。

中でも特に印象に残ったお話は、四七組目の具平親王・後鳥羽院の番いとその周辺の組の関係についてだ。後鳥羽院周辺の組では院の配流体験が暗示されるようになっているそうだ。例えば、四六組目の百三十番では左（藤原道信）が「明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな」、右（行尊）は「草の庵を何露けしと思ひけむ漏らぬ岩屋も袖はぬれけり」の二

首が配列されている。左は恋歌で右が雑歌であるが、どちらの歌も耐え難い孤独を詠んでおり、院の流されたことによる孤独が暗示されている。

このように院周辺の組では暗示された歌が配列されている。しかし、初撰本で対応させ過ぎたために、再撰本では四九組目の赤染衛門の歌を二首差し替えて院との結びつきを緩和させている。また、院は自身の歌では隠岐のことを暗示することで明示していると誤解されないため、そして後代への影響も考えたために、新古今歌風な歌を差し替えて叙景に徹していた。

これらが行われた理由は、『時代不同歌合』が私的なものではあるものの公的な意識を持って作られたからだそうだ。院は自分の立場を明示して『時代不同歌合』が私的なものに転落してしまわないように、暗示させることでリスク回避をしていた。

現在、私は中古ゼミで『新古今和歌集』について学んでおり、その中で配列に関して考えることもある。『新古今和歌集』ではどのような意図があって歌が配列され、また隠岐本では除棄されたのか、今回の講座で学んだことを活かして考えていきたいと思う。

後鳥羽院が読者に見せたい姿

四回生　岡　田　愛　海

寺島氏は、勅撰集や私歌集について検討する際には、最低でも歌の善し悪し、作者、歌の配列の三点を考慮しなければならないと述べられている。そして、今回の「『時代不同歌合』再考」でもこの三点を踏まえながら考察された。

後鳥羽院は、隠岐配流後に編纂した『時代不同歌合』を何度も改訂しており、その改訂作業の中で注目されるのは歌人の組み換えと歌の差し替えである。どの歌人を番にするか、その歌人の中でもどの歌を使用するかは後鳥羽院の裁量で決まる。そのため、特に具平親王と後鳥羽院の番とその周辺の番には注目しなければならない。

後鳥羽院は、初撰本では自身の歌に隠岐配流での辛い心情を思わせる歌を配している。しかし、再選本では、四六番から四九番の配列の中で隠岐配流の後鳥羽院の辛い心情を想起させるが、自身の歌には情よりも景を重視した歌を配す。ここで、後鳥羽院の歌のみが配列の中で浮かび上がる。そして、情よりも景を重視した歌を配すことには、読者が歌の解釈を深読みし、誤解が生じるのを防ぐためでもある。後鳥羽院は、隠岐配流での悲しみは徹底

的に暗示し、反対に、周りの歌の配列によって明示したのである。

私は、現在、卒業論文で『隠岐本新古今和歌集』における後鳥羽院歌について研究している。『隠岐本新古今和歌集』も後鳥羽院の親撰のため、自身の姿をどのように読者に見せるのかは後鳥羽院が決める。『隠岐本新古今和歌集』の中で、述懐性を持つ歌は多く除棄されているが、『時代不同歌合』の後鳥羽院歌は、初撰本歌が残されており、述懐性が全く無くなったわけではないことがわかる。

以上から、後鳥羽院は、隠岐配流後に作品を何度も改訂し、理想とする自己を表現しようとしていた。そして、院自身に関する歌では、隠岐配流の体験への憂苦は控えめにするよう意識していた。後鳥羽院が読者が誤解を招かぬよう自身の歌を考慮していたことは新しい気づきであり、卒業論文制作において大いに役立った。

国文学会ウォーク体験記（十一月十一日）

思い出とともに

一回生　安田莉子

十一月十一日、国文学会ウォークに参加した。今後の学びや自身の生活に活かすために参加したのはもちろんだが、幼いころから憧れていた京都という地を楽しむために今回の学会ウォークに申し込んだ。今回の行き先であった京都御所とその周辺、梨木神社と蘆山寺は京都の風情を感じられるとても良い場所だった。萩の花が美しかった梨木神社、紫式部のゆかりの地とされ、歌碑や貝合わせの展示などを見学した蘆山寺。「源氏庭」では、住職の方から蘆山寺の歴史についてお話を伺いながら庭を見学した。桔梗が有名とのことだったが、残念ながら時期が過ぎており、花を見ることは出来なかった。花が咲いていなくても十分に美しい景色だったが、桔梗の花が咲いたら、圧巻の美しさになるのだろうと感じた。来年にでも、時期を合わせて拝観したいと思う。蘆山寺も梨木神社も初めて訪れた地であったし、京都の風情を十分に感じることが出来た、とてもいい場所だった。しかし、私が今回の学会ウォークの中で一番の印象に残ったのは京都御所である。

京都御所を訪れたのは初めてではなかった。時期は定かではないが、確か小学校高学年か中学一年生の時であったと思う。祖父母と姉と、一度訪れたことがあった。その時は何かの催しの一環として、当時の装束をまとった人々が蹴鞠をしており、祖父母たちと見学したことを覚えている。どのあたりで行われていたのか、なぜ行われていたのか、記憶はもう遠いが、この記憶が残っているのは京都に初めて訪れた思い出であることもだが、今は亡き祖母と出かけた、という思い出であるからだろう。今回の学会ウォークで御所を訪れた時、当時見たことを記憶しているのは高御座と御帳台、紫宸殿の「左近の桜」、「右近の橘」くらいだったが、御所を散策していると自然と思い出が蘇ってきた。大学生としての思い出も幼い時の思い出もより美しいものになった。

京都秋寒散策

三回生　東　千紗
増田実桜

コロナの影響により、しばらく開催が見送られてきた学会旅行。今年は規模を縮小して久しぶりに開催された。今回は京都御所とその近辺を散策する。この日は京都に木枯らし一号が吹いており、いよいよ冬の気配を感じる日であった。十二時三十分、今出川駅に全員集合し、最初の目的地である京都御所へ出発する。

私たちは二十一年間京都で過ごしてきたにも関わらず、京都御苑を近道として利用する程度で、京都御所に入るのは今回が初めてであった。お気に入りの場所は「御内庭」だ。真っ赤な振袖を着た外国人観光客がおり、庭の緑に振袖の赤が映えていたのが印象的であった。

京都御所と言えば、敷地の広大さも特徴の一つである。敷地の巨大化には、天皇のプライベート空間の増築が背景にあるらしい。ところで、天皇はどのようなプライベート時間を過ごしていたのだろうか。どのような生活を送っていたのだろうか。当時の生活を想像してみることで、歴史を楽しむことが出来た。

京都御所を後にし、少し歩いて梨木神社に向かう。大きく育った萩が並ぶ参道を抜けると、こぢんまりとした神社が見えてくる。大通りに囲まれた賑やかな御所とは打って変わって、住宅街の中にある梨木神社は、長閑で心地の良い場所であった。

最後は、廬山寺を見学する。この寺は『源氏物語』の執筆地と言われている場所で、夏になると「源氏庭」と呼ばれる庭園に綺麗な紫色の桔梗が咲き誇るそう。夏の「源氏庭」もぜひ見てみたい。

最後に、引率してくださった宮崎先生、山中先生、田上先生、そして本イベントを企画してくださった方々へ。半日という限られた時間でしたが、充実感はそれ以上のものでした。普段なら訪れない場所に行き解説を聞き、より京都の魅力に気づくことができたと思います。ありがとうございました。

『女子大國文』投稿規定

一、（投稿資格）

① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。

② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、（刊行回数・時期・投稿の締め切り）

① 毎年二回、九月と一月に刊行する。

② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする（厳守）。

三、（投稿の枚数）

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚（注・表・図版などを含む）を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする（多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可）。

四、（投稿に際して提出すべきもの）

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部（審査用。二部ともコピーしたものでも可）。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部（審査用）と、投稿原稿が収められている電子データ（ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること）。

五、（投稿に際しての注意事項）

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、（本学教授）（本学大学院博士後期課程）（本学文学部国文学科四回生）などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること（採否の知らせや校正送付等のため）。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、（投稿先）

〒六〇五―八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三五番地
京都女子大学国文学会
『女子大國文』編集事務局

七、（投稿論文の採否）

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、（校正）

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、（本誌・抜き刷りの贈呈）

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、（掲載論文の著作権及び電子媒体による公開）

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、（規定の改正）

① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。

② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方です。

大谷俊太・川島朋子・小山順子・山中延之

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果、三点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

（野澤・宮﨑）